

グアテマラへようこそ 第10回

「お昼をどうぞ」 宇田有三（フォトジャーナリスト）

中米グアテマラの観光地アンティグアで「トゥクトゥク」を見かけた。東南アジアのタイで見かけるのと同じ形の小型三輪タクシーだ。あの「トゥクトゥク」が、地球の反対側でも走り回っている。しかも地元では、スペイン語ではなくタイ語で「トゥクトゥク」と呼んでいる。

在グアテマラ15年目の友人によると、「トゥクトゥク」を見かけるようになったのはこの2、3年のこと。おそらくタイを訪れた欧米人が持ち込んだのではないかと。「トゥクトゥク」は、地域を問わず、観光地を代表する乗り物なんなんだと妙に納得した。

グアテマラを訪れる観光客 その多くは、北米や欧州から伝統的なマヤ民族の鮮やかな民族衣装を目当てにやって来る。このインディヘナとも呼ばれるマヤの先住民族は、グアテマラの人口の約6割を占める。もっとも簡単に「マヤ」と言っても、その使用言語は24もあり、ひとことで彼らを単純にひとくくりにはできない。

首都グアテマラシティを歩いていると、民族衣装を身にまとったマヤの人を見かける。ただし、そのほとんどは女性だ。民族衣装を着た男性の姿は、地方に行かないと目にすることはない。歴史的に、マヤの男たちは欧米の侵略者の的になってきたからだ。そう、艶やかな民族衣装に目を奪われていると、この国が500年以上前にスペインから侵略されて以来、いまだに負の歴史が続いていることを忘れてしまう。

グアテマラの内戦が終わったのは96年の12月。あれから10年が経過し、戦禍の跡は今、表面上感じることはない。実際、首都や地方の村を訪れてみても、一般の人の軍部に対する恐怖は、以前よりも薄れている。時間の経過に伴い、軍の暴力によって20万人近い犠牲者を出した歴史は今、世界から忘れられようとしている。

94年、メキシコ国境が近いウエウエテナンゴ県を訪れた。市場で野菜売りのインディヘナのおばさんと話をしてみた。

「この国もいよいよ戦争が終わりが近づいてますね。今、一番つらいことは何ですか」

「実はね、市場でね、値切られるのがつらいんですよ」

貧乏旅行とはいえ、私は彼女たちの何十倍のお金を持って移動している。取材費を切りつめるとはいえ、言い値を値切る癖も付いている。観光客は私と同じように、自らの娯楽として値段交渉をすることもある。別に買わなくてもいい、その場の売買ゲームを楽しむのだ。ところが、インディヘナの女性たちは、わずか1Q（＝約12円）のために、観光客を相手にせざるを得ない日常がある。インディヘナたちは今、そこに生きる人間ではなく観賞の対象とされている。

しかし、そんな中、コナビグア（「連れ合いを奪われた女性達の会」）は、今も虐殺された（であろう）父・母、夫、息子・娘などの肉親を探し続けている。

マヤの先住民族文化は、基本的に共同体文化である。内戦の犠牲者は、伝統的な共同体の様式によって埋葬されることで初めて、「命の尊厳の回復を意味」することになる。そ

うでないと、殺された死者の魂は、永遠にさまよってしまう。亡くなったとはいえ、近親者を伝統的に葬りたいという気持ちが強いのだ。

2004年6月、グアテマラの首都グアテマラシティから乗り合いバスで約2時間、チマルテナンゴ県コマラパ村を訪れた。遺骨発掘の現場に立ち会うためだ。

軍部は内戦当時、各地方で自警団を組織し、政府に反対する言動をとるものを監視し、密告し、虐殺に荷担させた。先住民族の人びとは、強制的にその自警団に参加させられた。自警団に参加しなければゲリラのシンパと疑われ、参加すれば同じ共同体のインディヘナを抑えつける役割を担ってしまう。内戦中にインディヘナの共同体社会は引き裂かれた。

同じ共同体の一方が加害者となり、他方は被害者となった。戦後、彼らは同じところに住み続けなければならない運命を背負う。旧軍部の施設であったコマラパの丘の周りには今、発掘と同時進行でコンクリートの壁が作られている。

「お昼をどうぞ」

発掘の現場にいる人には、インディヘナの女性たちから分け隔て無く昼食がふるまわれていた。軍部と極めて強いつながりのある地主に雇われ、コンクリートの壁を作っている作業員にも声がかけていた。実際、その壁を作っている作業員たちは、インディヘナたちにとって、自分たちの発掘をじゃまする立場をしているのだ。だが、時に冷たい雨の降る山の中の作業は、発掘にしる壁作りにしるつらい仕事なのだ。いつも冷や飯を喰わされるのは、現場で働く人々なのだ。作業員たちも生活のために地主に雇われたに過ぎない。そうせざるを得ない状況を、インディヘナの彼女たちは十分に知っている。厳しい状況を生き延びてきた彼女たちだからこそ、心配りができるのだ。

心配りと簡単に言うけれど、自分達の肉親を殺した加害者(に加担する者を)を赦すという行為は想像を超えている。だが、彼女たちの活動は、実際に虐殺を行った者よりも、それを命令した者、それを見過ごしてきた社会システムを告発している。コナビグアは2006年22件の発掘作業をする予定だ。

彼女たちの行動の源になっているのは、自分達の苦しみや悲しみを乗り越え、正義や公正が通用する社会が来ると信じているからだろう。

今、世界を見渡してみても、どこかしこで、民族・宗教・人種・経済格差・資源争奪、さまざまな原因で紛争が起きている。あちこちで絶えず、憎しみの連鎖が増幅、再生産されている。どこで争いが止むのか。

声を上げることのできない被害者に「赦す」という行為を、被害者以外の者が一方的に押しつけてはならないだろう。だが、世界の片隅で、グアテマラ内戦の一番の被害者であるインディヘナの彼女たちがねばり強く進めている活動から、紛争解決に向けて深い勇気とヒントを生み出しているようだ。

(『クロスロード』2006年5月号に執筆)

宇田有三(うだ・ゆうぞう)/フォトジャーナリスト  
筆者のサイト、<http://www.uzo.net/>